

2. 御城下の祭礼の歴史

戦前の名古屋は中世より伝統を誇る熱田大山祭や東照宮祭、若宮祭、三之丸天王祭の名古屋三大祭を中心に70輜以上の山車を保有し、名古屋の名物と言えば「祭り」といわれるほど山車祭りが盛大であった。

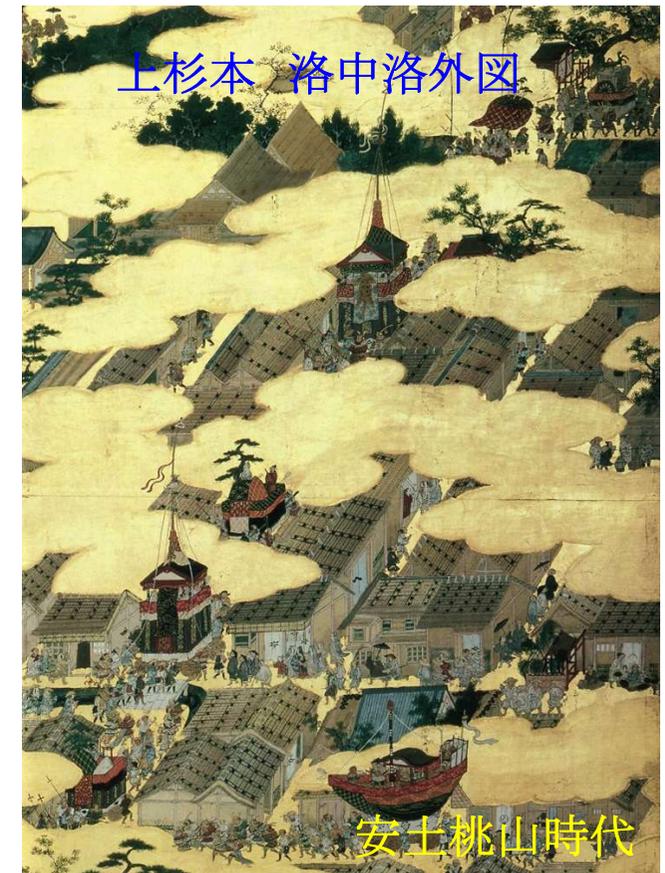
我が国の山車祭りの起源は祇園御霊会(祇園祭)の山鉾と言われる。京では貞観11年(869)に疫病・伝染病などの難から逃れるため牛頭天王が祀られた。

全国の国の数を表す66本の矛を立て、その矛に諸国の悪霊を移し宿らせることで諸国の穢れを祓い、神輿3基をお旅所へ渡御し、薬師如来を本地とする牛頭天王を祀り御霊会を執り行った。

祇園祭という名称は、八坂神社が神仏習合の時代に、比叡山延暦寺に属して祇園社と呼ばれていたことに由来する。

祇園社の祭神の牛頭天王が仏教の聖地である祇園精舎の守護神であるとされていたので、祇園神とも呼ばれ、神社名や周辺の地名も祇園となり、祭礼の名も祇園御霊会(祇園祭)となった。

神輿渡御が中心の祭りであったが、室町時代の半ば、応仁の乱(1467-1477)の直前には山鉾が58基登場している。



尾張地方の山車祭りの起源は津島天王祭で永享8年(1436)に始められたとの説がある。津島神社の祭神は牛頭天王。津島神社は東国の本社で、西の八坂、東の津島と称された。祭礼には大山・車樂と呼ぶ大型の舟・山車が出され、当時は川祭りと山車祭りの混合体であった。慶長4年(1599)に山車2輛が船型に変わり、川祭りに統一された。大山は明治6年に廃絶された。※津島神社は神仏習合で境内脇には神宮寺(現牛頭山宝寿院)があった。(本尊:薬師如来)



■ 宵祭り



■ 朝祭り

文明年中(1469-1486)には、熱田南新宮社、亀尾天王社の天王祭には同様に大山、車樂が曳き出された。大山にはからくり人形、車樂には能人形が飾られた。熱田天王祭の大山は20メートル以上の高さがあり、日本一の大きさを誇った。

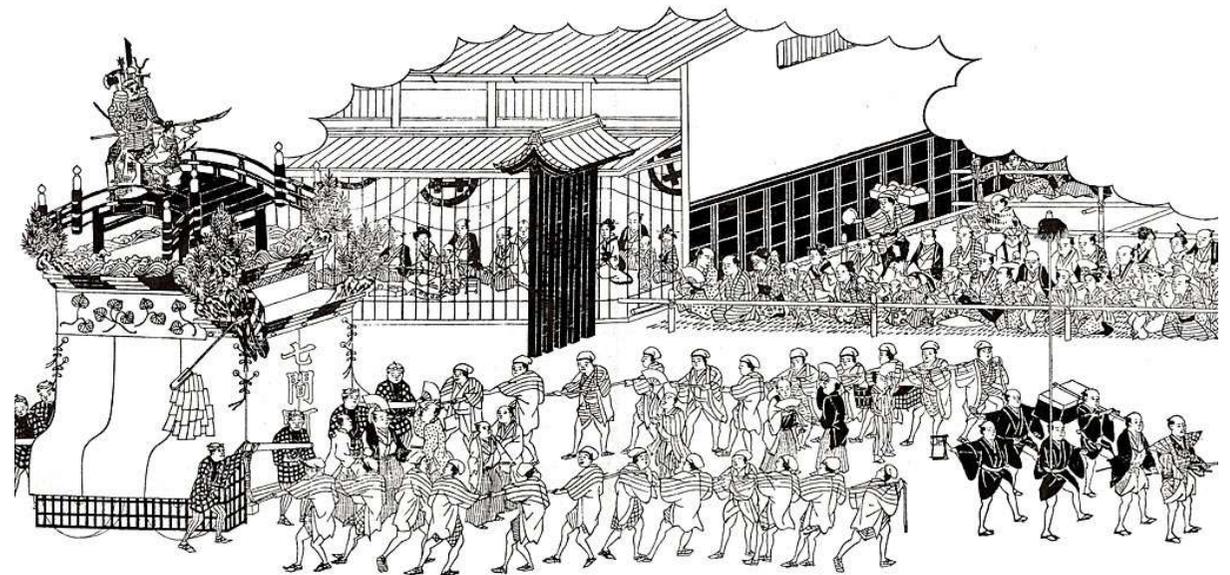


■ 熱田大山祭 大山と車樂

徳川の世に代わり、家康の命により那古野台地に名古屋城が築城され、清洲越しが実施されると、名古屋は江戸、京、大坂の三都に次ぐ大都市に成長し、各分野の優れた職人達に移り住んだ。家康没三回忌の元和4年(1618)に東照宮祭が始められた。翌5年に東照宮が完成した。この年の祭礼に七間町が西行桜の人形を乗せた山車を造り、行列に加わった(山車の第一号)。翌6年には、わずかな警固を従えた神輿渡御が始められ、七間町は京の五条大橋で牛若と弁慶が立ち合いをするからくり仕掛けの橋弁慶車を新たに曳き出した。この山車が大反響を呼ぶと、他の町々も技を競って山車や警固を造りだし、山車9輛と35箇町からなる警固の壮大な祭り絵巻が完成した。御城下ではこの東照宮祭に刺激され他の地区も山車祭りを始めた。

■明和3年(1766)頃の橋弁慶車

■尾張名所図会 森高雅筆 ※天保9年(1838)~12年(1841)を取材



延宝4年(1676)には若宮祭で黒船車を始め7輛の山車が曳き揃えられた。祭礼は名古屋城内三之丸に鎮座する天王社へ参拝し、東照宮祭と同じく尾張藩主の御上覧を仰いだ。

御城下で誕生した東照宮祭の山車や警固をモデルにして、犬山祭などの山車祭りが始められており、尾張藩一円の山車祭りのルーツと言っても過言ではない。

七代藩主宗春は八代将軍吉宗の質素儉約政策に対抗し、芸能・祭礼を積極的に奨励する政策を打ち出した。この時代、三都をしのぐ繁栄ぶりで、職人、商人達が他国から移り住んだ。からくり人形師の玉屋庄兵衛もその一人である。

享保10年(1725)より、警固行列の規模が半減されていた東照宮祭も享保18年(1733)に昔の壮大なスケールに戻された。各町が山車の新造や、からくり人形の変更、豪華な刺繍の水引幕や大幕を新調するなど派手さを競った時代である。

※玉屋庄兵衛は林和靖車の人形師として京都より、玉屋町に移り住んだ。

■若宮八幡社祭礼之図



十代藩主齋朝は鷹狩りと称して祭礼見物を行い、祭礼日や行程の変更をさせて山車を曳かせた**大の祭り好き**であった。

三之丸天王祭の車樂を支配する車ノ町には**胡蝶の舞のからくり人形**を備えた山車を下賜し宵宮に曳き出させた。これを**見舞車**と呼んだ。

人々が車樂に笹提燈を献灯する行いが、本格的な山車へと進化したものである。

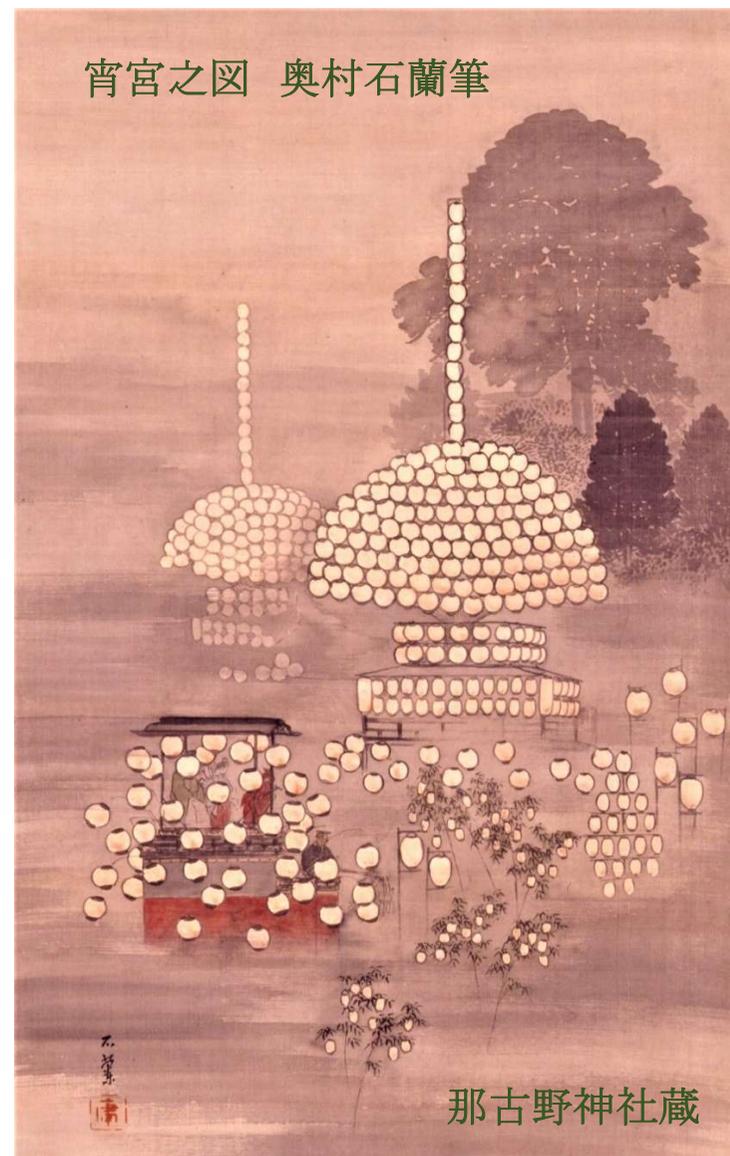
文化・文政・天保年間を中心に多数の見舞車が造られた。

これまで**尾張藩の許しが出ず**、山車を曳くことが許されていなかった御城下近在の町村では、**藩主の祭り好き**が幸いし、この期に本式の山車祭りとして認められた。

御城下に限らず**尾張一円でも山車の新造**が相次ぎ、町民パワーが爆発して、祭りが一番盛り上がった時代であった。

元治2年(1865)の家康公没250年祭では総勢6,800人以上の壮大な行列を拵え、東照宮祭は全国一の祭礼となり、名古屋祭といえば東照宮祭を指す様になった。

宵宮之図 奥村石蘭筆



那古野神社蔵

明治維新を迎えると藩の資金援助も無くなり、神社の遷座、氏子区域の変更、近代化など環境の変化が生じ祭礼の維持が難しくなった。

- ・熱田大山祭の大山・車樂は町の近代化の影響を受け曳行ができなくなり巻藁船の祭礼へと変わった。
- ・東照宮祭、若宮祭では警固の変更・減少や山車の休車が相次ぎ、記念祭以外に行列の全てが揃うことは稀となった。
- ・天王祭は車樂支配の町村が離脱し、不要となった見舞車は他所へ譲渡された。
明治25年(1892)神輿2基を新調し、新しい氏子での新式の祭礼(那古野祭)を始めた。

※江戸時代、名古屋型の山車を曳く事は大変難しかったので、明治に藩政が終わると各地で名古屋型の山車を曳き始めた。 神皇車、美濃祭り、有松祭り、田原祭り等

城下町が誕生して以来、東照宮祭、若宮祭、三之丸天王祭の名古屋三大祭を中心に、御城下の祭りは当地方の山車祭りの中心的な役割を果たしてきたが主役である山車の殆どを、昭和20年(1945)の太平洋戦争で名古屋城天守閣と共に焼失してしまった。